舌切りすずめ

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。子供(こども)がないものですから、おじいさんはすずめの子を一羽(わ)、だいじにして、かごに入(い)れて飼(か)っておきました。

ある日おじいさんはいつものように山へしば刈(か)りに行って、おばあさんは井戸(いど)ばたで洗濯(せんたく)をしていました。その洗濯(せんたく)に使(つか)うのりをおばあさんが台所(だいどころ)へ忘(わす)れていった留守(るす)に、すずめの子がちょろちょろかごから歩(ある)

き出して、のりを残らずなめてしまいました。

おばあさんはのりを取りに帰って来ますと、お皿の中にはきれいにのりがありませんでした。そののりはみんなすずめがなめてしまったことが分かると、いじのわるいおばあさんはたいへんおこって、かわいそうに、小さなすずめをつかまえて、むりに口をあかせながら、

「この舌がそんなわるさをしたのか。」

と言って、はさみで舌をちょん切ってしまいました。

そして、

「さあ、どこへでも出ていけ。」

と言(い)って放(はな)しました。すずめは悲(かな)しそうな声(こえ)で、「いたい、いたい。」と鳴(な)きながら、飛(と)んでいきました。夕方(ゆうがた)になって、おじいさんはしばを背負(せお)って、山から帰(かえ)って来(き)て、

「ああくたびれた、すずめもおなかがすいたろう。さあさあ、えさをやりましょう。」

と言(い)い言(い)い、かごの前(まえ)へ行(い)ってみますと、中にはすずめはいませんでした。おじいさんはおどろいて、

「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行ったろう。」

と言(い)いますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしのだいじなのりをなめたから、舌を切っておい出してしまいましたよ。」
とへいきな顔をして言いました。
「まあ、かわいそうに。ひどいことをするなあ。」
とおじいさんは言って、がっかりした顔をしていました。

二

おじいさんは、すずめが舌を切られてどこへ行ったか心配でたまりませんので、あくる日は、夜があける

とさっそく出かけていきました。おじいさんは道々、つえをついて、

「舌切りすずめ、
お宿はどこだ、
チュウ、チュウ、チュウ。」

と呼びながら、あてもなくたずねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きなやぶのある所へ出ました。するとやぶの中から、

「舌切りすずめ、
お宿はここよ。

「チユウ、チユウ、チユウ。」

という声（こえ）が聞（き）こえました。おじいさんは喜（よろこ）んで、声（こえ）のする方（ほう）へ歩（ある）いていきますと、やがてやぶの陰（かげ）にかわいらしい赤（あか）いおうちが見（み）えて、舌（した）を切（き）られたすずめが門（もん）をあけて、お迎（むか）えに出ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらっしゃいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。あんまりお前（まえ）がこいしいので、たずねて来（き）ましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがとうございました。さあ、どうぞこちらへ。」

こう言（い）ってすずめはおじいさんの手（て）をとって、うち

の中へ案内しました。

すずめはおじいさんの前に手をついて、

「おじいさん、だまってだいじなのりをなめて、申しわけがございませんでした。それをおおこりもなさらずに、ようこそたずねて下さいました。」

と言いますと、おじいさんも、

「何の、わたしがいなかったばかりに、とんだかわいそうなことをしました。でもこうしてまた会われたので、ほんとうにうれしいよ。」

と言いました。

すずめはきょうだいやお友だちのすずめを残らず集

めて、おじいさんのすきなものをたくさんごちそうをして、おもしろい歌(うた)に合わせて、みんなですずめ踊(おど)りを踊(おど)って見(み)せました。おじいさんはたいそうよろこんで、うちへ帰(かえ)るのも忘(わす)れていました。そのうちにだんだん暗(くら)くなってきたものですから、おじいさんは、

「今日(きょう)はお陰(かげ)で一日(にち)おもしろかった。日の暮(く)れないうちに、どれ、おいとまとしましょう。」

と言(い)って、立(た)ちかけました。すずめは、

「まあ、こんなむさくるしいところですけれど、今夜(こんや)はここへとまっていらっしゃいましな。」

と言(い)って、みんなで引(ひ)きとめました。

「せっかくだが、おばあさんも待っているだろうから、今日は帰ることにしましょう。またたびたび来ますよ。」

「それは残念でございますこと、ではおみやげをさし上げますから、しばらくお待ち下さいまし。」

と言って、すずめは奥からつづらを二つ持ってきました。そして、

「おじいさん、重いつづらに、軽いつづらです。どちらでもよろしい方をお持ち下さい。」

と言いました。

「どうもごちそうになった上、おみやげまでもらって

はすまないが、せっかくだからもらって帰りましょう。だがわたしは年をとっているし、道も遠いから、軽い方をもらっていくことにしますよ。」

こう言っておじいさんは、軽いつづらを背負わせてもらって、

「じゃあ、さようなら。また来ますよ。」

「お待ち申しております。どうか気をつけてお帰り下さいまし。」

と言って、すずめは門口までおじいさんを送って出ました。

三

日が暮(く)れてもおじいさんがなかなかもどらないので、おばあさんは、

「どこへ出かけたのだろう。」

とぶつぶつ言(い)っているところへ、おみやげのつづらを背負(せお)って、おじいさんが帰(かえ)って来(き)ました。

「おじいさん、今(いま)ごろまでどこに何(なに)をしていたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでないよ。今日(きょう)はすずめのお宿(やど)へたずねて行(い)って、たくさんごちそうになったり、

すずめ踊りを見せてもらったりした上に、このとおりりっぱなおみやげをもらって来たのだよ。」

こう言ってつづらを下ろすと、おばあさんは急ににこにこしながら、

「まあ、それはようございましたねえ。いったい何が入っているのでしょう。」

と言って、さっそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました。それを見るとおじいさんは、とくいらしい顔をして言いました。

「なにね、すずめは重いつづらと軽いつづらと二つ出

して、どちらがいいというから、わたしは年はとっているし、道も遠いから、軽いつづらにしようといってもらってきたのだが、こんなにいいものが入っていようとは思わなかった。」

するとおばあさんは急にまたふくれっ面をして、

「ばかなおじいさん。なぜ重い方をもらってこなかったのです。その方がきっとたくさん、いいものが入っていたでしょうに。」

「まあ、そう欲ばるものではないよ。これだけいいものが入っていれば、たくさんではないか。」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これか

ら行って、わたしが重いつづらの方ももらってきます。」

と言って、おじいさんが止めるのも聞かず、あくる日の朝になるまで待たれないで、すぐにうちをとび出しました。

もう外はまっ暗になっていましたが、おばあさんは欲ばった一心でむちゃくちゃにつえをつき立てながら、

「舌切りすずめ、
お宿はどこだ、
チュウ、チュウ、チュウ。」

と言い言いたずねて行きました。野を越え、山を越

えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、

「舌切りすずめ、
お宿はここよ。
チュウ、チュウ、チュウ。」

という声がしました。おばあさんは「しめた。」と思って、声のする方へ歩いて行きますと、舌を切られたすずめがこんども門をあけて出てきました。そしてやさしく、

「まあ、おばあさんでしたか。よくいらっしゃいました。」

と言って、うちの中へ案内をしました。そして、

「さあ、どうぞお上がり下さいまし。」

とおばあさんの手を取っておざしきへ上げようとしましたが、おばあさんは何だかせわしそうにきょときょと見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

「いいえ、お前さんのぶじな顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまっておくれでない。それよりか早くおみやげをもらって、おいとましましょう。」

いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲の深いおばあさんだとあきれてしまいました

が、おばあさんはへいきな顔で、
「さあ、早くして下さいよ。」
と、じれったそうに言うものですから、
「はい、はい、それではしばらくお待ち下さいまし。
今おみやげを持ってまいりますから。」
と言って、奥からつづらを二つ出してきました。
「さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、
どちらでもよろしい方をお持ち下さい。」
「それはむろん、重い方をもらっていきますよ。」
と言うなりおばあさんは、重いつづらを背中にしょい上げてあいさつもそこそこに出ていきました。

おばあさんは重いつづらを首尾よくもらったものの、それでなくっても重いつづらが、背負って歩いて行くうちにどんどん、どんどん重くなって、さすがに強情なおばあさんも、もう肩が抜けて腰の骨が折れそうになりました。それでも、

「重いだけに宝がよけい入っているのだから、ほんとうに楽しみだ。いったいどんなものが入っているのだろう。ここらでちょいと一休みして、ためしに少しあけてみよう。」

こう独り言を言いながら、道ばたの石の上に「どっこいしょ。」と腰をかけて、つづらを下ろして、急いで

ふたをあけてみました。

するとどうでしょう、中を目のくらむような金銀さんごと思いの外、三つ目小僧だの、一つ目小僧だの、がま入道だの、いろいろなお化けがにょろにょろ、にょろにょろ飛び出して、

「この欲ばりばばあめ。」と言いながら、こわい目をしてにらめつけるやら、気味の悪い舌を出して顔をなめるやらするので、もうおばあさんは生きた空はありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助けてくれ。」

とおばあさんは金切り声を上げて、一生懸命逃げ

出しました。そしてやっとのことで、半分死んだようにまっ青になって、うちの中にかけ込みますと、おじいさんはびっくりして、

「どうした、どうした。」

と言いました。おばあさんはこれこれの目にあったと話して、「ああもう、こりごりだ。」と言いますと、おじいさんは気の毒そうに、

「やれやれ、それはひどい目にあったな。だからあんまりむじひなことをしたり、あんまり欲ばったりするものではない。」と言いました。

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社
　１９８３（昭和58）年5月10日第1刷発行
　１９９２（平成４）年４月20日第14刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年8月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。